

おいでん・さんそんSHOW 11月号

2018.11.01発行

特集 | しもやま高原野菜協議会

野菜づくりで守り抜く、ふるさとの景色



10月19日(金)に野菜を出荷したしもやま高原野菜協議会のメンバー



イオンスタイル豊田の店頭と並ぶしもやま高原野菜

センター長のミライのフツに 向かって!

センター長 鈴木辰吉

山村地域において「高齢者が元気になるモビリティ社会」をめざす超小型EV(コムス)を活用した社会実証が、3年の実証期間を間もなく終える。東京大学

名古屋大学、豊田市、足助病院が共働してヨタ・モビリティ基金が資金提供する「たすけあいプロジェクト」の一環。センターは、スタート時から実証参加モニ

ターの募集などの役割を担ってきた。協力いただいた住民は約50人。新しい物、機械好きで少し目立ちたがり屋の高齢者。いつでもでも住み続けられる地域を創りたい思いが共通する人々が「里モビサークル」として活動している。

実証の最終評価はこれからだが、高齢者の個人利用においては、ちょい乗りできてガソリン不要の超小型EVは、単なる利

便性だけでなく、話しかけられて笑顔になる対人効果や社会参加を促す効果も生んでいるようだ。

また、普通車の運転に不安を感じる高齢者の単距離移動の乗り物として、限定免許の創設を提言するなど国の制度作りに貢献できるかもしれない。

実証終了後の取組みについてサークル内で話し合いが行われている。実証で使用済みのコムス

32台の無償譲渡を受け、(仮)「里モビ互助会」を組織、つくラッセルに拠点を置き、維持費を利用者が負担しながら、超小型EVを地域で運用する仕組みづくりにチャレンジしようというのである。行政や大学が予算を確保し「実験」を行うこれまでも「線を画す、住民によるシェアシステムは」「所有価値」から「使用価値」への価値観の転換を図る画期的なものになりそうなお気がする。

豊田市山村部の販売農家は2010年の時点で約1500戸。10年前と比べると、およそ3分の2に減少しています。

そのうち65歳以上が8割を占め、今後の担い手不足と耕作放棄地の増加が心配されます。

農家が減っている一方、最近スーパーで人気があるのが、地元で採れた「地場野菜」のコーナー。これがあることで、売り場全体の売上が伸びる要因にもなるそうです。

昨年9月に豊田市広路町にオープンしたイオンスタイル豊田も例外ではなく、地場野菜コーナーを設けています。ひときわ目立っているのが『豊田しもやま高原野菜』の看板。

出荷をしているのは、しもやま高原野菜協議会。代表の木下貴晴さん(44歳)、メンバーの松田敏明さん(71歳)に販売までの

12月中旬から3月を除いて、毎週月曜と金曜に松田さんの自宅ガレージで集荷します。その後、都合のつくメンバーが軽トラックで豊田市公設卸売市場まで運びます。ガソリン代は、出荷者の売上から集める手数料でまかなっています。

経緯と、活動内容について伺いました。

イオンスタイル豊田に、下山区の野菜を

「イオンスタイル豊田に販売するための野菜を出荷してくれませんか、と公設卸売市場に店を構える仲卸業者から相談を受けました」と松田さん。

量や、配送の手間を考えると、個人での出荷は難しいため、しもやま高原野菜協議会を発足し、昨年の9月から出荷を始めました。

イベント情報

第7回いなかとまちの文化祭〜こころを耕すくらしのマルシェ

- 地元農家の野菜やお菓子などステキなお店と仲間が大集合。ほかほかあったまる地元の食材を使った田舎汁や、五平餅、フランク、つきたてもちなど、おいしさいっぱい!
- 日時 | 平成30年11月24日(土) 10:00~16:00(雨天決行・荒天中止)
 - 場所 | B館T-FACE1Fシティプラザ・豊田市駅西口ペデストリアンデッキ
 - いなかとまちのステージ | Omorning set ○**ブラク○岡森フォレストーズ○Duo le lien○スアラスクマ○Leo(国際民族音楽)○五反田のお囃子と棒の手○パフォーマン ス書道風上会○山里合唱団こだま
 - いなかとまちのシンポジウム | テーマ「暮らしに生かす、自然のチカラ」○馬の力〜横山晴樹(うまや七福)○森の力〜今村豊(根羽村森林組合参事)○竹の力〜森由紀夫(木文化研究所)○蜂蜜の力〜西村新(こいけやクリエイト)○進行役〜鈴木辰吉(おいでん・さんそんセンターセンター長)、洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)
 - 森の体験ブース | 丸太切り体験、ミニツリーづくり、さをり織り、ペンダントづくりなど
 - 主催 | いなかとまちの文化祭実行委員会
 - 問合せ | いなかとまちの文化祭実行委員会事務局TEL:0565-62-0610(おいでん・さんそんセンター担当:田中)
 - 備考 | 出店店舗などの最新情報は耕Lifeホームページ内特設ページで随時更新 www.kou-life.com/bunkasai/



例えば、こんなプログラム...

- 全27プログラムの申込を受付中!
- 築150年の古民家カフェで鹿カレーランチ付き **女子ハンターに聞く山里暮らし**
実施日時 2018/12/01(土) 10:30 ~ 14:30
築150年の古民家リノベーションし、ジビエカフェと獣肉解体処理施設を運営。そんな移住女子ハンターの山里暮らしをお伝えします。ハンターとしてのモットーは、『捕獲したものは、なんでも食べてみる』ことです。
 - 自分だけのマイスプーンを作って、地産地消ランチ、温泉にもつかっちゃおう!
蒔絵(まきえ)の技でマイスプーンをつくらう!
実施日時 2018/11/25(日) 11:30 ~ 15:00
矢作川上流の温泉施設 寿楽荘で、小原に息づく工芸の文化と温泉を楽しむプログラムです。漆の伝統的な技「蒔絵」を体験して、食事を楽しんだ後はゆっくりお湯につかって日頃の疲れを癒しましょう。

公式Webサイトはこちら <https://toyota-inaka.com/>

その他の情報は、センターHPをチェック!

REPORT

小原地区/岩下町と旭地区/旭八幡町に 集落活動応援隊を派遣

旭 小原

ボランティア作業を通じて、都市住民と地域住民が交流

小規模・高齢化が進んだ山村部の集落では、人手不足で集落活動(草刈りなど集落の共同作業)が困難になっています。センターではこれらの集落でボランティア活動を行う「集落活動応援隊」を組織し、都市住民と山村地域の人々との交流を促しています。

9月22日(土)、小原地区・岩下町に7名を派遣しました。少雨のなかでしたが、無事に予定範囲の草刈りを終えることができました。台風21号で傾いたサクラを立てなおす作業もお手伝いしました。10月14日(日)には、5名を旭地区・旭八幡町に派遣しました。メンバーは、岐阜県御嵩町、豊田市都市部からの参加です。

旭八幡町は、13世帯、33人、高齢化率61%、0-14歳の子どもは0人

の小規模高齢化集落です。翌週に迫った八幡宮例大祭に向け、参道、境内の草刈りと清掃、しめ縄づくりなど、朝8時から昼まで半日のボランティアを行いました。

昼は、地域住民と応援隊は、地元つくば工場の五平餅を、一緒に食べ、この春、町内にオープンした「つくラッセル」(旧築羽小学校)など明るい話題に花を咲かせていました。(坂部友隆・鈴木辰吉)



(上)台風で傾いたサクラを立て直す作業
(下)共に食卓を囲む地元住民と応援隊の皆さん

REPORT

原木しいたけ栽培研修 説明会を開催

下山

栽培経験35年以上のベテランから学ぶ本格研修

第1期に引き続き、今年もおいでん・さんそんセンター森林部会の企画で「第2期伐採からはじめる原木しいたけ研修」を行います。講師は、下山地区で、35年以上原木しいたけの栽培をしている近藤一義さん。およそ2年をかけ、樹木の伐採から、植菌、ほだ場(しいたけの畑)へ移動させるまでを学びます。

10/5(金)に説明会を開催したところ、6名の参加がありました。「風味のある原木しいたけが好きだから」「自家製しいたけを新しい商品に加えたい」などと参加動機は皆さん様々でした。研修についての説明に、興味津々な様子で聞き入っていました。

研修の途中からでも参加が可能です。興味のある方はお気軽に、おいでん・さんそんセンター坂部にお問合せください。(坂部友隆)

【研修の概要】
 場所 | 下山地区内の天然林
 期間 | 2018年10月~2020年10月頃
 参加費 | 20,000円※交通費・食費・燃料費・保険加入費等は別途自己負担



説明会の様子

REPORT

地域経済を考える バケツゼミ

旭

(株)M-easyのコンサルティングを公開

(株)M-easyは、旭地区に移住した戸田友介さんが営む会社です。2015年から旭地区と小原地区の新聞販売店を引き受け、2017年からは旧築羽小学校跡地を活用した「つくラッセル」コンソーシアムの代表機関を担うなど、単に利益を上げるのではなく、暮らし続けていける地域づくりのための企業活動を行っています。

今後とも社が地域で持続的に経営していくための相談に乗っているのが、経営コンサルタントの村田元夫さんです。村田さんは、これまでの企業活動が、「地域経済のバケツの漏れを防ぐ」ことに寄与してきたと分析。8月からは、経営相談の場を「バケツゼミ」として、地域スモールビジネス研究会(※)のメンバーに開放。地域経済を循環させ、地域を持続するために、今後どんなことができるのか、地元の経済の状況や、求められる仕事について、参加者で意見を出し合っています。(西田又紀二)



地域経済のバケツ漏れイメージ



木下貴晴(きのしたたかはる)さん(左)と松田敏明(まつだとしあき)さん(右)



意気揚々と出荷してくる農家のお母さん



たくさんの種類の野菜を出荷している様子



出荷してくる野菜と伝票をチェックする

袋詰めされた野菜に貼ってある『しもやま高原野菜協議会』のシールは、この出荷の時だけしか貼ることができません。協議会で品質を確認したもののだけに貼り、ブランドの価値を作っていくことが狙いです。

出荷を始めて一年。これまでを振り返り、どんなことが良かったか聞いてみると三つ教えてくれました。
廃棄せずにお金になる
 一つ目は、出荷した野菜が、必ずお金になること。多い時には、月の売り上げが約90万円ありました。

「仲卸業者は、イオンスタイル豊田以外にも売り先をいくつも持っているため、どんなに同じ種類の野菜が多くても買い取ってくれます。傷があったとしても、給食センターや漬物工場などに加工用として販売してくれそうなので、ありがたいです」と木下さん。
 協議会ができる以前は、自宅用で食べきれない野菜は廃棄してしまっていました。それを捨てることで、やりにくい繋がっています。

毎週顔を合わせて 井戸端会議
 二つ目は、集荷の日には必ず顔を合わせる。農家のほとんどが70〜80代の女性。取材当日、次々に軽トラが集荷場に横付けされ、荷下ろしを終えたお母さんたちは、早速井戸端会議を始めました。
 「きれいな小松菜だねえ」、「これ、何ていう名前の野菜?」、「これ誰のさつまいも?」松田さんが収穫して蒸したサツマイモをほおばりながら、終始賑やかに情報交換をしていました。

下山地区内で牧場を営み、今年から協議会に参加している30代の志賀祐子さんは、「まだ野菜づくりを始めて間もないので、色々と教えてもらえて楽しいです」と笑顔を見せます。
野菜を育てる モチベーションアップ
 三つ目は、新しい野菜づくりにチャレンジできることだと松田さんは話します。
 「売り場に並べるからには、お客さんに喜んでもらえるように多品目の野菜を出すことを協議会として心がけています。」
 生姜、菊芋、カブ、セロリ、里芋、サツマイモ、インゲン、長ネギ、アケビ、チンゲンサイなど、比較的野菜が少ないと言われる10月でも、これだけの種類が出ていました。
 「みんな腕が良いよ。きれいな野菜は全て出荷に回すから、自宅で食べる野菜がクズばかりになる」とお嫁さんが嘆いているそうです(笑)。
ふるこの景観を守る
 今後の課題は、協議会のメンバーをどう維持していくか。



(※)月に1度、主に豊田市山村部へ移住してきた人が集まり、近況などの情報共有を行う場。